

〔共同研究：天変地異の社会学Ⅴ〕

《琉球—沖縄》における海上からの「来訪者」と 天変地異の「記憶」

—ウルマ島とニライカナイをめぐって—

一 色 哲

はじめに

現在、沖縄・宮古・八重山の各群島や奄美群島を含んだ琉球列島（南島地域）は、国の「島嶼防衛」の政策にともなって軍事化が進んでいる。沖縄島では、北部の辺野古や高江で新しい米軍基地の建設が進行している。その影で、奄美大島や宮古島、石垣島、そして、「国境の島」・与那国島では日本国の海上自衛隊だけではなく、航空自衛隊、そして、陸上自衛隊の基地・拠点の構築とミサイル等の配備が進んでいる。

沖縄や奄美では、豊穡や幸福をもたらす神が海上にある異界・ニライカナイからやってくるという信仰がある。しかし、実際には、海上からやってくるのは、豊穡や幸福ばかりではない。南島を毎年襲う台風がもたらす暴風雨は海上からやってくる。また、軍隊や戦争も、何度も海上からやってきた。しかも、そのような禍々しい災厄と破局的な破壊は、それぞれ、別々にやってくるのではない。

台風は、毎年、南島の農作物や生活を襲い、甚大な被害をもたらす。しかし、台風の来ない夏は、南島に早魃をもたらし、結果として農作物は実らず、飢饉が南島を襲うことになる。つまり、台風は、甚大な被害とともに、多量の雨を降らせて南島に豊穡をもたらす。一方、自衛隊や米軍の駐留が、南島全体に経済的利益や安全をもたらすかについては、議論がある。また、沖縄県全体の基地経済への依存率は、5%程度に過ぎない¹⁾。それに比して、南島に基地が存在することによる弊害は、詳述はしないが計り知れない。

このように、南島に豊穡や幸福をもたらすものと、災厄や破壊をもたらすものは、事例によっては、それぞれ等価ではないが、それらがもたらす被害と恵みは、表裏をなしている。こう考えると、南島に暮らす人びとは、災厄を幸福に変え、破壊を豊穡へと変える力をもっているともいえるだろう。

本稿では、天変地異を、禍福を併せもつ海上からの「来訪者」と位置づけて、その「来訪

1) 沖縄米軍基地問題検証プロジェクト『それってどうなの？沖縄の基地の話。』（同プロジェクト、2016年）p. 38。

キーワード：天変地異、明和の津波、ウルマ島、米軍基地、ニライカナイ

者」の「記憶」が南島の人びとの営みにどのように残され、あるいは、そのような「記憶」が薄れていくことでどのような事態が起こるかについて考察をしたい。具体的には、1771年の「明和大津波」に代表される地震と津波、それに、国境の島である与那国島の祭祀における「異国人」への祈りを素材として、天変地異と国防や軍事化の問題を取り上げる。

1. 《琉球—沖繩》にとっての天変地異とは

天変地異は、主として気象等にかかわる「天変」と、地上で発生する異常の「地異」から成っている。このうち、「天変」には、台風、旱魃、集中豪雨、温暖化等による海面上昇等の異常気象や日食・月食、彗星のような天文現象、あるいは、隕石の落下などが含まれる。一方、「地異」は、火山の噴火や地震、それにとりもなう津波など自然現象を指すことが多い。また、2011年の東日本大震災における福島第一原子力発電所のメルトダウンによる放射能汚染などは、現代的で、自然現象と人為的要因が複合した“新しい「地異」”といえるかも知れない。いずれにしろ、天変地異は、突発的に発生し、正確には予測が困難である破局的事象であり、結果として、一国のみならず、国際的に拡散し、社会の混乱や人びとの生活の破壊を惹起するものである。

《琉球—沖繩》における災害や天変地異の公式の記録としては、18世紀に琉球王国の正史として編纂され、琉球王国末期まで追記された『球陽』が、まず挙げられる。そこには、琉球王国各地で起こった旱魃や台風などによる暴風の被害、地震や津波、それに、地面の隆起や陥没、病虫害の異常発生、異常低温による雪や霰の記録などが記されている。

しかし、『球陽』をみるまでもなく、《琉球—沖繩》には、毎年、台風が到来し、ときに甚大な被害を出してきたことはよく知られている。そのなかには、数十年、百数十年に一度というような巨大台風もある。しかし、毎年確実に到来する台風は、ある程度想定内ということで、《琉球—沖繩》の人びとにとって必ずしも「天変」とはいえないかも知れない。したがって、発生頻度からすると、異常低温や旱魃、病虫害の発生などは、琉球の王朝と人びとにとって、天の怒りを啓示するかのような「天変」にあたり、地震や津波などは「地異」にあたると言えるだろう。

ところで、琉球王国は、1429年から1879年²⁾まで、つまり、日本本土の時期区分でいうと室町時代から明治初期までの450年間存続した。農業生産力が限られており、強力な武力をもたなかった島国が、中華帝国や日本の中に位置し、のちには、欧米列強の脅威にさらされながらも、このような長期間存続したことは、奇跡的なことであった。しかし、この間には、上記の自然災害による天変地異以外にも、王国の存続を揺るがすような事態に直面することもあった。

2) 明治政府は、廃藩置県の翌年にあたる1872年、一方的に琉球王国を廃し、琉球藩とした。そして、1879年に軍隊約300名、警官約160名を派遣し、首里城を占領。沖縄県を設置した（「琉球処分」）。これにより、名実共に琉球王国は滅亡した。

琉球王国は、建国当初から中国、朝鮮半島など東アジア地域をはじめとして、ジャワやマラッカなど東南アジア、さらには、インドなど南アジアまで活動圏を拡大し、幅広く交易を行っていた³⁾。その交易の過程で、琉球王国の船団は、しばしば、倭寇の襲撃を受けている。これにより、琉球王国は、朝鮮半島との外交や通商関係が制限される事態に陥る。このように、異国人による襲撃に関しては、後述のように、国境の島である与那国島などにとって、切実な問題であり、現在の「島嶼防衛」政策につながる問題でもある。

また、琉球王国は、1609年、薩摩藩による軍事侵略を受けた。これにより、奄美群島は薩摩藩に割譲され、琉球王国全体も薩摩藩による間接的な支配を受けるようになる。このような外患を、琉球王国末期と沖縄県になった近代以降も、《琉球一沖繩》人びとは何度か経験している。先述の「琉球処分」⁴⁾がそれであり、1930年代の「ソテツ地獄」⁵⁾もそのような「外患」であるといえる。

また、1930年代後半から南西諸島（南島）全体で軍事化が進み、軍事基地や要塞が各地に構築され、軍隊が進駐してくる。これらの進駐軍は、南島と日本を防衛する名目で来島するが、他面で、好ましからざる海上からの「来訪者」でもあった。こうした南島の軍事化は、結果的に第2次世界大戦末期の沖縄戦に帰着し、その後、27年間にわたる異民族支配（米軍による軍事占領）⁶⁾の原因となった。

異国人による襲撃、戦争や外国軍隊の駐屯などは、もちろん、自然災害ではない。しかし、予測が困難であることも多く、国際的にも影響が波及する恐れがあり、国家や社会が破滅的な打撃を受ける可能性がある点において、「地異」的な要因が多く含まれているといえるのではないか。

《琉球一沖繩》は、日本と中国・台湾の間にあり、朝鮮半島にも近く、1,200 kmにもわたって点在する島々で構成されている。これらの地域は、台風の通り道にあたり、後述の通り、巨大地震の震源地を間近にしているという自然環境的な特徴と、経済的・政治的・軍事的な要衝にあるという地政学的な特徴を兼ね備えている。それゆえに、《琉球一沖繩》における天変地異は、自然災害だけではなく、人為的な現象を含めて考察する必要があると、筆者は考えている。

3) その活動は、「レキオ（琉球）」として、イエズス会の宣教師たちからローマ法王庁に報告されていたほどである。

4) 「琉球処分」により現在的那覇市古波蔵に熊本鎮台の分営がおかれ、日本の軍隊がはじめて《琉球一沖繩》に駐屯することになる。

5) 「琉球処分」以降、沖縄県の農業は、内国植民地化政策の一環としてサトウキビのモノカルチャー化がすすんだ。1930年代になると砂糖の国際価格の暴落を受け、沖縄県の経済は壊滅的な打撃を受け、人びとは、元来救荒作物であったソテツの実を食べなければならぬほどの経済的な苦境に陥る。その状況は「ソテツ地獄」と呼ばれたが、それをきっかけに、沖縄県から国内外への出稼ぎと移民が一挙に促進されるようになる。

6) 奄美群島は、対日講和条約が調印された翌年の1953年12月25日に本土復帰を果たす。

2. 琉球海溝を震源とする巨大地震と「明和大津波」の概要

先述の通り、《琉球—沖縄》における自然災害に関する文字による歴史的記録は、『球陽』の記事による限り500～600年前まで遡れるに過ぎない。したがって、記録に残されている巨大地震はさほど多くない。しかし、この地域が、日本列島の他の地域同様、かつて激しい地震や津波、地殻変動を経験している痕跡は散見される。

なにより、《琉球—沖縄》の雅名「ウルマ島」は、一説には、珊瑚礁を指す「ウル」と島の「マ」、つまり、珊瑚礁の島を意味しているといわれている。実際に、南島の島々の大部分が、かつては海中にあった珊瑚礁が隆起してできた大地で構成されている。他に、真偽のほどは定かではないが、与那国島近海には「海中遺跡」と称される構造物がある。このようなことから、この地域にかつて激しい地殻変動があったことが強く推定される。

地形的に見ても、琉球列島の東シナ海側には「沖縄トラフ」といわれる海盆があり、太平洋側には、フィリピン海プレートがユーラシアプレートに沈み込んで形成された「琉球海溝」⁷⁾が形成されている。この琉球海溝は、四国沖の南海トラフと接続しており、東海・東南海・南海トラフを含んだ地域の地殻変動が連動した超巨大地震の危険性が指摘されている。

また、琉球列島の北端に当たる喜界島では1911年6月15日にM8.0、最大震度6の地震が発生し、津波の被害もあり、奄美群島から沖縄島にかけての地域で多数の死傷者を出している。喜界島は島の南西部から北東部にかけてゆるやかに隆起しており、島の東岸は約200mの断崖となっている。この断崖は、およそ12万年かけて形成されてきたと考えられる。その間、過去7,000年間に4回の大規模な隆起が確認されている。また、喜界島東岸には、津波により打ちあげられた巨石の痕跡がある。このことから、先述の1911年の喜界沖地震と同様の震源で、津波をともなった巨大地震がこれまでも発生したことがわかる。そして、琉球海溝は、台湾にまで至っている。台湾では、しばしば、大地震が発生していることは、よく知られている。

さて、記録に残っている範囲で、この地域で最も大きな被害があったのは、後述の1771年におこった八重山地震とそれに伴う「明和大津波」である。この地域では、静岡大学などの調査で、過去2,000年間で少なくとも4回の大津波の痕跡が確認され、約600年に1回の間隔で巨大地震が発生していると考えられている⁸⁾。また、琉球王国末期に琉球に滞在したフランス人のカトリック神父による1855～60年の記録によると、約3年半の間に地震が45回発生したと記録されている⁹⁾。

さて、この八重山地震は、1771年4月24日（明和8年3月10日）に発生した。この地震の震源は八重山群島近海で、推定マグニチュードは7.4～8.7と推定されている。また、地震震

7) 琉球海溝は、長さ1,350 km、幅60 km 前後、平均深度は6,000～7,000 m で、最深部は約7,500 m。

8) 『沖縄タイムス』2017年5月31日。

9) 『沖縄タイムス』2016年2月8日。

生のメカニズムは、フィリピン海プレートがユーラシアプレートに沈み込む過程で発生した海溝型地震と考えられている。ただ、地震の規模に比べると震度は大きくなく、震源に近い石垣島でも最大震度は4程度だったと推定されている。

しかし、プレート境界での地震の他に、海底で緩やかな地滑りが生じた可能性があり、本震の後で宮古・八重山群島を中心として巨大な津波が襲来した¹⁰⁾。それにより、宮古島・石垣島では島の大半が浸水し、津波の最大遡上高は30mになった¹¹⁾。そのため、地震による直接の被害はほとんどなかったが、両群島で12,000名余りの死者・行方不明者を出した。

このうち石垣島では9,400人余りが犠牲になり、14の村が流された。犠牲者の数は全住民の3分の1にあたり、地震・津波による「地変」後、労働人口の減少は深刻であった。また、ただでさえ狭隘な耕作可能地が、津波による塩害の被害を受け、農業政策が低迷し、飢饉が発生した。それに加えて、疫病などの伝染病も蔓延し、さらに住民の犠牲は増大した。一説によると、この時の影響はその後も100年余り続き、明治初年には石垣島の人口は地震・津波前の3分の1に減少していたという。まさに、「地変」の典型的な例である。

また、この大津波に関してはいくつかの伝説や奇伝が残されている。そのうち、津波を人魚と関連付ける伝説が各地に残っている。牧野清『八重山の明和大津波』（私家版、1968）によると、西表島、黒島、宮古島には人魚が火あぶりにされているときに、海神が現れて、津波を起し、人魚を助けたという伝説が残っている。また、石垣島東岸の野原崎には、人魚を住民が助けたことにより、人魚から津波の襲来を告げられて、それを信じた人々が救われたという伝説が残っている。

この他、明和大津波の「記憶」としては、石垣島東岸の津波石群があり、そのうちのいくつかは天然記念物に指定されている。「高こるせ石」「あまたりや潮荒」「安良大かね」「バリ石」などがそれである。また、宮古群島の宮古島や下地島、伊良部島などにも同様の巨石が存在している。しかし、近年の調査により、これらの内陸の巨石群は、明和大津波だけではなく、約600年周期でこの地に襲来する過去の津波の痕跡であることがわかってきている。

これらの伝説が、津波の痕跡として宮古・八重山群島各地で「記憶」されているのは、歴史的記録と人びとの災害・天変地異の記憶の融合がそのような現象を起こしているとも考えられる。いずれにしろ、民衆は、文字史料とは別のかたちで大災害や天変地異の「記憶」を残していると考えられる。だとすれば、次章で述べる村落の立地にもこうした「記憶」が影響を与えていると考えられる。

3. 天変地異襲来の「記憶」と沖縄における土地利用

沖縄島の地図を眺めたときに、人口が比較的多い都市部は東シナ海岸に多いことがわかる。

10) この地震は典型的な「ぬるぬる地震（津波地震）」で、海底面のずれが滑るような程度時間をかけておき、その範囲が大きかったことから、大津波が起こったと考えられる。

11) 当時の記録からは、60m近い遡上高があったといういわれているが、周辺現象と矛盾するところがある。

その理由はいくつか考えられる。まず、台風による被害を避けるためである。沖縄に襲来する台風の場合、まず、太平洋からやってきて、沖縄近辺で速度を弛め、その後方向転換をして、日本本土に向かうことが多い。そのため、より台風被害の少ないと考えられる西海岸（東シナ海側）に人口が集まりはじめたと考えられる。また、琉球王国は、中国の王朝に朝貢しており、東シナ海側に使節団を迎えたり、貿易の根拠地となる港湾を建設することが、合理的であったと考えられる。

この他、前章で述べた大災害や天変地異の「記憶」が、一般民衆の行動に影響を与えたとすると、人間の一生の何十倍、何百倍の周期で到来する地震やそれに伴う津波の「記憶」が、《琉球—沖縄》の村落立地と土地利用に影響を与え、かつてそのような災害があったところにはひとが住まなかったということは、仮説として充分成立すると思われる。

天変地異や地震とは違うが、石垣島では島の南部の人口が集中している。これは、島の東海岸から北にかけての地帯はマラリアの有病地帯であり、地域の住民はそのようなことを熟知したうえで、それら問題のある地域には住まないようにし、子孫にもそれを伝送していった事例がある。

しかし、近代以降の社会経済の変化により、こうした村落立地や土地利用の形態も変わっていった。現在沖縄県の人口は約145万人で、その9割が沖縄島に住んでいる。また、産業活動も活発になっているので、太平洋側の与那原（与那原町）や泡瀬（沖縄市）などに埋め立て地が造成され、人びとが住みはじめている。

一方で、戦前、集落があったところに日本軍の飛行場等の軍事基地ができ、それが原型となって、戦後、米軍の基地がつくられる。普天間基地や嘉手納基地、伊江島や読谷の訓練場などがそれである。その他は、必然的に住民が余りいない地域に米軍基地が建設されたため、米軍占領中は、太平洋岸にも基地が建設されるようになった。泡瀬通信施設、ホワイト・ビーチ地区、キャンプ・マクトリアス、キャンプ・コートニー、金武訓練場（ブルー・ビーチ、レッド・ビーチ）、キャンプ・シュワブ、辺野古弾薬庫、北部訓練場などがそれである。また、普天間基地の移転先として問題が起きている名護市辺野古地区や高江のヘリパットも太平洋岸である。

これら、太平洋岸の地域であるが、沖縄県が公表している津波のハザードマップ¹²⁾によると、それらの地域の米軍基地のうち、辺野古弾薬庫など、内陸地域の基地以外はほとんどが10～20mの津波の被害が想定されている。つまり、我々の一生のうちには起こらないかも知れないが、何百年かの周期で“定期的”に訪れる巨大地震と破局の大津波が、こうした軍事施設を襲う可能性が否定できないということである。

そして、これらの軍事基地には、さまざまな兵器だけではなく、自然環境にとって有害な化学物質も貯蔵・使用されている。巨大地震は基地の構築物を損壊・倒壊させ、その後の大

12) http://www.pref.okinawa.lg.jp/site/doboku/kaibo/h27tunami/h27tunami_b.html

津波はそこから有害物質や弾薬等の危険物を一挙に海上に流失させることになる。まさに、東日本大震災の際の福島第一原発のような事態が、沖縄島の太平洋岸や東シナ海側の米軍・自衛隊の基地で生じることになると考えるのには、十分な根拠があると考えられる。

「天災は忘れた頃にやってくる」は、物理学者の寺田寅彦のことばだといわれている。人は、大災害に直面したときにさまざまな形でそれを記録し、後世への警告として天災の「記憶」を伝えようとする。しかし、時間が経つに従って次第にその「記憶」が忘れられていく。先の東日本大震災の際、仙台市若林区の浪分神社などに代表される近世以前から存在している宗教施設の多くが津波からの被災を逃れている点に着目して、過去の天変地異に関する民衆的な「記憶」のあり方が見直されている¹³⁾。つまり、過去の経験を伝えた先人たちの努力を無視して、危険な地域に住宅を作り、鉄道を通し、工場や街を造ったことによって、震災の被害が拡大したということである。

このようなことから、《琉球一沖繩》でも、そのような天変地異についての民衆的「記憶」の痕跡が認められるだろう。そして、それは、かつては太平洋岸に人口が集中する傾向にあったという村落立地と土地利用にみられるのではないかと考えられる。しかし、数百年から数千年の周期で襲来する巨大地震と大津波の「記憶」は、近代以降、科学的知識の普及と建築・生活技術の発展により、かえって「迷信」として忘却される傾向にあるのではないか。そして、そのような「忘却」は、再び起きる天変地異により、有害・危険物質の流出など環境の破壊などの二次被害を引き起こすことになる。

「はじめに」でも述べたとおり、大津波も外国軍隊も、《琉球一沖繩》にとって海上からの「来訪者」であり、ときに禍福を併せもちながら、地域と社会に影響を与える「地変」の一部であった。次章では、海上から「来訪」する脅威について論じたい。

4. 国境の島・与那国島における「異国人」への祈り

与那国島は、《琉球一沖繩》・南島の最西端、すなわち、日本国の最西端にある国境の島である。地理的には八重山群島に含まれているが、同群島の主島である石垣島からは約124 kmの距離にある¹⁴⁾。そのため、のちにも述べるが、祭祀等の文化の点で群島の他地域とは異質なものがある。一方で、台湾（中華民国）の宜蘭県蘇澳鎮までは111 kmの距離しかなく、島の最西端・西崎（いりざき）にたつと、年に数日は屏風のようにそびえ立つ台湾の山々が望める。こうした地政学的な位置にあることで、歴史的に台湾との交流があり、外来勢力の侵入をうけ、その脅威に直面することも多くあった。

2016年3月、この与那国島に、陸上自衛隊の与那国駐屯地が開設され、与那国沿岸監視隊が配備された。この部隊は情報収集のための部隊であって、離島警備部隊ではない。2000年

13) 高田知紀・梅津喜美夫・桑子敏雄「東日本大震災の津波被害における神社の祭神とその空間的配置に関する研究」(『土木学会論文集 F6 (安全問題)』68巻 (2012) 2号, 2012年)

14) 東京からの距離は、約2,000 kmあり、日本国内で最も東京から距離のある地域である。

ごろから台湾や中国の船舶等に対処するために自衛隊の配備が島内外で検討されてきたが、2015年2月に自衛隊配備の是非を問う住民投票が行われた。この投票は、中学生以上の未成年や永住外国人にも投票権が与えられ、有権者1,276人のうち1,094人が投票し（投票率は85.74%）、賛成632票、反対445票という結果に終わった。

その後、駐屯地と監視レーダー等の施設建設のため最大600名の工事関係者が島に滞在し、一時的に島の経済が活気づいた。また、駐屯地開設以降は、自衛隊員とその家族約200名が転入し、人口が久しぶりに1,700名台に増加した。つまり、人口の約12%が自衛隊関係者ということになる。このため、町政にも変化が生じている。具体的には、自衛隊関係者の転入により住民税4,000万円と駐屯地賃貸料1,500万円余りが増収となる、自衛隊員の子供も通う小中学校や幼稚園の給食は無償化された。

さて、この国境の島には、農作物の播種から収穫までを一サイクルとして、大小あわせて30の祭事が各公民館を単位に行われている。それらの祭事では、それぞれ、家族円満や子孫繁栄、無病息災、五穀豊穡、航海安全、海上平穏、大漁祈願等が集落ごとに祈られている。また、近年では、自衛隊の駐屯地の司令官が招かれることも多いと聞いている。

そのうち、神が降りてくる神の月（カンヌティ）といわれる旧暦10月以降の庚申の日から25日にわたって行われるマチリ（祭り）はカンブナガと呼ばれている¹⁵⁾。このマチリの期間中、島人たちは四足の動物、特に牛の殺傷と食肉が禁止されるなど、与那国でも正月準備のための神聖な行事である。

このカンブナガのうち、久部良（くぶら）という集落で行われるクブラマチリでは、異国人や大国人（海賊）の退散の祈禱がされる。このマチリに関する言い伝えによると、昔、島には外敵が度々襲来し、食糧や家畜を掠奪したり、婦女子に暴行を加えるなどの被害が相次いだ。そのため、島人は大きな草履を作り、海に流し、島には強大な巨人がいるように見せかけて外敵を防いだという。つまり、このマチリでの祈禱は、予測不能で、住民に被害を与える「地異」を防ぐものであった。

与那国島は、第二次世界大戦末期の沖縄戦では、軍隊が駐屯していなかったため、連合国軍の攻撃対象とはならず、影響をほとんど受けていない¹⁶⁾。また、米軍占領下でも米軍基地や関係施設は設けられていない。一方で、1945年から50年代の初めにかけて、与那国島は沖縄各地と台湾や中国大陸（香港等）との間の「密貿易」の拠点になっていた¹⁷⁾。そのため、この時期には、島の人口が流動人口を含めて2～3万人に膨れ上がり、闇市をはじめ、飲食店や食堂が100軒以上あり、映画館も多数あったといわれている。しかし、このような繁栄は、琉球政府ができ、占領軍の統制が厳しくなるとなくなってしまった¹⁸⁾。

15) <http://www.town.yonaguni.okinawa.jp/donan-bunka/program2/2.html>

16) 先島（宮古・八重山群島）で軍隊が駐屯していた宮古島や八重山では米軍や英国軍による空襲があり、被害を出している。

17) 小池康仁『琉球列島の「密貿易」と境界線：1949-51』（森話社、2015年）

18) 密貿易で取引されたのは、沖縄戦で使用された薬莖等の金属類や米軍基地から違法な手段で持ち出

軍隊の駐留は、平時には安全保障を担保するものになるが、戦時には敵国の攻撃対象になるなど、新たな外患を招く重大な要因にもなる。また、軍隊の駐留による外来者の増加は、税収や選挙などを通じて地域の自治に大きな影響を与えることになるが、これについても地域に利益のみをもたらすとはいえない。

現在の与那国島では、国防の祈祷を行うマチリに、自衛官が来賓として出席しているが、このような関係は、必ずしも永続的なものとはいえない。沖縄島でも、駐留米軍の兵士と地域住民との間には犯罪発生時の敵対的な関係だけではなく、日常的には友好的な関係も見られる。その一方で、地震や津波といった「地異」による破滅的な破壊が、有害・危険物質の漏泄等の二次的「地異」を生じさせるように、特殊で強力な力をもった海上からの「来訪者」の存在が戦乱等の「地異」にかかわるようになっていけば、地域社会に壊滅的な影響を加えることにもなる。

つまり、《琉球—沖縄》へ海上からやってくる「来訪者」は、同地に禍福をもたらす両義的な存在である。そして、「海上の道」にあたる《琉球—沖縄》に暮らす人びとは、そのような存在と共存し、利益を得、損害を最小化する術を身につけながら生活しているように感じられる。

お わ り に

本稿は、桃山学院大学総合研究所の共同研究「天変地異の社会学Ⅳ」（共同研究プロジェクト 14連239, 2014年4月～2017年3月）の研究成果の一部である。同共同研究では、本稿に関わるフィールドワークを下記の2回行っている。

まず、2015年10月31日～11月3日に沖縄島でフィールドワークを行った。ここでは、沖縄島各地と伊江島や久高島など離島でも調査を行った。また、2015年9月15日～18日には奄美大島と加計呂麻島でフィールドワークを行った。

筆者は、これまでも、すでに何十度も沖縄県各地・各島や奄美群島の島々でフィールドワークを行ってきた。筆者の研究課題は、近代以降における南島各地のキリスト教史であるが、「天変地異の社会学Ⅴ」の共同研究によるフィールドワークで、新しい視点を与えられた。考えてみれば、外来宗教であるキリスト教もまた、南島の人びとにとって海上からの「訪問者」である。キリスト教は、プロテスタントもカトリックも、福音信仰とともに、人権や個人の尊重といった近代的な意識や学校教育、社会・福祉事業などを展開し、南島の近代化に寄与してきた。

しかし、奄美大島や喜界島などでは、キリスト教は弾圧され、その他の島でも、戦前、軍事化が進むなかで、伝道・布教に対して圧力が加えられた。このようにキリスト教を忌避す

された物資などであった。特に、金属類は、その後、中国大陸での国共内戦で再使用され、米軍主体の国連軍と中国の義勇兵が闘った朝鮮戦争でも、中国兵の物資として再利用された。そのため、米軍は、1950年代になるとこのような「密貿易」を取り締まるようになった。

る人びとにとっては、この「来訪者」は禍福の「禍」をもたらすものであった。さらに、戦後、「キリスト教国」である米国の軍隊が南島を軍事占領し、軍政を敷いたが、外国軍隊という海上からの「来訪者」と、どうように「来訪者」であったキリスト教との間に新しい関係が構築されていく。

さて、本稿では、巨大地震・大津波と外国軍隊の侵略・進駐について「天変地異」の観点から論じてきた。現在のところ、沖縄島には、「地変」である地震・津波により、同様に「地変」ととらえることもできる外国軍隊（米軍のみならず、自衛隊も含む。あるいは、尖閣諸島などに対する中国の軍事的影響力行使に対する危惧も含む）が排除・消滅することを願うような言動・祈りは、管見の限りでは見られない。

以上、天変地異は、常に禍福の両義性を可能性として含む存在がある。それゆえに、天変地異は、歴史的に重要な局面で、破滅的な被害をもたらしながら、新しい時代を開いていく存在であるといえる。

参考文献

牧野清『八重山の明和大津波』（私家版，1968年）

牧野清『新八重山歴史』（私家版，1972年）

球陽研究会編『沖縄文化史料集成5 球陽 読み下し篇』（角川書店，1974年）

田里友哲「沖縄における開拓集落の研究」（『琉球大学法文学部紀要 史学・地理学篇』第23号，1980年3月）

（2018年3月20日受理）

Visitors from Oceans and Memory of Natural Disasters in Ryukyus: On “Ulm Islands” and “Nirai-kanai”

ISSHIKI Aki

In Ryukyus, there is the legend that God bringing fertility and happiness comes from a different world in the ocean, that is, from “Nirai-kanai”. However, in reality, what comes from the ocean to the Ryukyus not only brings richness. For example, typhoons that comes to Ryukyus every year causing great disaster. It is said that fortune and misfortune are intertwined.

In this paper, I am talking about the great tsunami that occurred in the Ryukyus and the “pray for the Gentiles” on the island of the border. And I discuss various problems of the natural disaster in the Ryukyus.

First, I will describe the characteristics of Ryukyus’ “natural disaster”. Second, I will describe the outline of the “Meiwa Tsunami” and the legend related to the disaster. This tsunami took place in 1771, causing major damage at Miyako Island and Ishigaki Island.

Thirdly, we discussed the relationship between disaster caused by the tsunami and land use in Okinawa Island. There, the damage of the tsunami has been confirmed on the Pacific side in the past. So, on the island of Okinawa, there is no big city on the Pacific coast. However, people have forgotten the disaster, and the US military bases were built there.

Finally, in this paper we discuss “Gentile prayer” at Yonaguni Island. Yonaguni Island is an island of the border. Therefore, for a long time, the inhabitants of the island were plagued by foreign diseases. On the other hand, Yonaguni Island has many festivals (“Machiri”). Thirty festivals are being held in a year. Among them, in the village called Kubura, the residents pray for the dissolution of foreigners and big man (pirates). To Yonaguni Island, such a disaster came from the ocean. Also, in the festivals of this island, in recent years, the commander of the Self-Defense Forces (SDF) is invited from the residents as guests. For this island, the SDF is also a visitor coming from the ocean. The visitors, including their families, have over 200 people, accounting for about 12% of the population. Tax revenues also increased. Visitors from the ocean with special and powerful power like the SDF and the US military are stationed in the Ryukyus. That fact is increasing the risk of the region getting involved in war. On the other hand, good relations between those visitors and residents are benefiting the area.

In conclusion, the people in the Ryukyus have received visitors from the ocean as beings that bring disaster and happiness. And people coexisted with such visitors, gained maximum benefit from them and minimized damage. As you can see, people in the Ryukyus have fascination and wisdom to live while facing natural disasters on the islands.

桃山学院大学

総合研究所紀要

Vol.44 No.2 2019.1

〔特定個人研究〕

論 文

知られざる敵性外国人：

オーストラリア人の見たタツラ収容所の日本人（2）……………金 本 伊津子 （ 1 ）

バングラデシュ独立戦争の映画表象 ……………南 出 和 余 （ 15 ）

3歳からできる「たべたのだあれ？」視力検査

——三歳児眼科健診で行なわれている視力検査の現状と課題から——……………高 橋 ひとみ
衛 藤 隆 （ 31 ）

共働的コミュニティにおける人の採用・教育・成長

——ネットトヨタ南国のケース—— ……………山 田 伊知郎 （ 43 ）

〔共同研究〕

論 文

《琉球—沖縄》における海上からの「来訪者」と天変地異の「記憶」

——ウルマ島とニライカナイをめぐる——……………一 色 哲 （ 55 ）

高齢者と図書館・生涯学習への大学教育の活用：

大学図書館の地域貢献を中心に ……………志保田 務 （ 67 ）

社会調査教育の現段階と将来像

——大学教育の転換期における教材・教授法の開発——
……………木 村 下 栄 二
阪 上 口 ね
高 井 祐 介
吉 田 昌 か
角 谷 昌 介
大 倉 季 子 則 久
（ 83 ）

近世・近代堺の都市史・地域史研究の可能性 ……………島 田 克 彦 （ 107 ）



桃山学院大学総合研究所